

海外渡航と研究活動

ベルギー・ルーバンとIMECでの生活

第3 (電気・電子) 工学系 助教授

石田 誠

ベルギーのブリュセルから東へ約25kmの位置にある、古い中世の建物が残るルーバン (Leuven) 市の郊外のIMEC (Inter-University of Microelectronics Center) で約11ヶ月弱研究に携わることができた。この研究所は1984年にベルギーのフランダース地方 (北半分) の政府により設立された大学間の本格的な総合ICセンターと言ってよい。ICの設計法から、材料、プロセス、デバイスの研究そして試作ICチップの供給までの半導体分野を網羅している。日本の大学にはない、そして世界の大学関係のICセンターとしては随一の規模と設備を誇っていると言っても過言ではないと思う。このセンターは、ヨーロッパでも古い大学の一つと言われているカソリックのルーバン大学 (1425年) の電気工学科のIC研究グループが源となっていて、IMECの建物は1986年に新築された近代的なものである。大学の人文・社会系は半径1km弱内の旧市街にあり、大きくて教会以外の古い建物は大学と違ってほぼ間違いないが、アパートはこの市の中心部にあり、IMECまでバスで15分、歩いて約40分 (たまに実行) である。

IMECでは私を入れて4名のグループで仕事をしたのであるが、立派なクリーンルームに入り、実際に実験を始めて何か異和感を覚えるのである。我々のグループにもミセス (在滞中2人目の子供出産) のAnnemieというシニア・アシスタントがいるが、大きくて複雑な半導体薄膜成長装置 (2年かかって新らしく開発したばかりの装置) の操作担当係となって、ウェハの洗浄準備から成長までを任せられ、プライドをもって仕事をしているのである。この分野で女性の研究者、技術者が男性と区別なく活躍している世界に突然入って、慣れるまで少し時間を要した。頭ではよく理解できるのであるが、新鮮さを感じた。もちろん秘書達はプロであるから、研究者達は余計な時間を雑用で取られることは少ないし、外国人研究者担当秘書は、研究者とその家族のことすべての面倒を見ている。実際、多くのことをお世話になり、心強い存在であった。本学にもあって良い秘書ではないだろうか。このように女性の活躍がまず目についた。日本に対する質問の中で、女性の職 (特に結婚後) についてのもの

が多く、日本女性の立場を誤解のないように説明するのに苦労したが、相手は必ずしも納得したとは思っていない。ちなみにヨーロッパでの失業率は女性も含めている。(ベルギーで9~10%、男性は約0%とのこと)

ルーバン大学の中で良いシステムと思ったのは語学センター (CLTと呼んでいる) である。世界中の主要言語 (日本語も) と種類も多いが、講義時間も朝9時から夜10時まで開かれていて、そのため学生と一緒に一般市民も同じクラスに参加できるのである。クラスは10数人から20人ぐらいで、新しい言葉を習得したい人であれば、年齢、国籍、職業など一切問題としないので、非常にユニークなクラスが出来上っていた。だから学生も刺激になるし、講義以外の社会勉強にも多いに役立つ。クラスは6段階のレベルに編成され、試験にパスすると上のレベルに行くシステムで、理由なく3回以上休むと試験を受けさせなくしている。授業料もきわめて安い。(大学関係者で8000円/年) だからブリュセルなどからも夜仕事を終えてかけつけて来ていた。

こんな環境のせいか、日本語を話すベルギー人も結構いることがわかった。(日本語のテキストは大名語学センターで使用している外国人留学生用の厚い2冊) 知人の奥様も1年間勉強しただけで漢字の手紙で連絡してきて、会話も1年とは思えなかった。

この間、研究以外にも色々な人々と接触でき、ヨーロッパの人々の豊かさが強く感じられた。人々の心、生活の楽しみ方、町の充実、歴史と文化の違いを感じさせられた。研究についても、論文の数のみが優先しがちな我が国の環境下で、真に本格的な研究が育つのか考えさせられる。論文数では効率が悪そうで、しかし正に歴史に残るものが出てきそうな研究姿勢は、古い町の歴史に見られるものと深くかわりあっているものと思える。しかしコンピュータを利用した最新の情報処理技術も実にうまく、大学のみならず社会に融け込ませていて、この点でも考えさせられた。最後にこのような機会を援助して下さった方々に心からお礼を申し上げたい。